

洋楽導入期における音楽用語の使い方

— 『音楽雑誌』に基づいて— (1)

Usage of music terminology during the introduction period of occidental music
— Based on “Music Magazine” — (1)

高山葉子

TAKAYAMA Yoko

Occidental music was introduced into classrooms through governmental policy in the Meiji era, and went on to root as a part of Japanese society. In order to understand the process by which this occurred, we extracted and inspected occidental music terms from volume 77 of “Music Magazine,” Japan’s first technical music journal (1890 to 1894 Music Magazine Co., Ltd. “reprint edition”, The Research Institute for Publications). We divided the extracted terms into six categories and examined two of those categories in this study: (1) instrument names and (2) terms related to the classification of instruments. As a result, we saw that in translating the names of musical instruments into Japanese, names were chosen following Japan’s indigenous instruments and that instruments were classified based on the terms already used for Japanese traditional music and dance. This study also reveals that occidental music took root in Japan by being absorbed into Japan’s traditional music culture.

【キーワード】

- ・ 音楽用語 musical terminology
- ・ 明治時代 The Meiji era
- ・ 音楽雑誌 “Music Magazine”

はじめに

洋楽の導入から1世紀以上の月日が流れた。今や日本の社会や学校教育の現場では洋楽が中心で、その様子は、あたかも洋楽がずっと以前から日本固有の音楽文化として存在してきたのではないかと錯覚する程である。しかし、洋楽導入が志された当時の日本の社会には、現在とは全く異なる音楽文化があり、その頃の大多数の日本人にとって洋楽は全く未知の音楽だったのである。人々が時代の必然に追われ、洋楽の導入を求めた時、それは一体どのような過程を経て学習され、社会に受け入れ

られていったのだろうか。本論は、日本の音楽専門雑誌第1号である『音楽雑誌』（音楽雑誌社、1890-1894）の復刻版（出版科学総合研究所、1984）全77巻に基づいて、その中から音楽用語を取り出し、それらが時代の経過とともにどのように変化し、日本の社会に定着してゆくのか、その過程を見てゆくことにする。

なお、これまでに刊行された日本の洋楽史の文献については、三浦俊三郎著『本邦洋楽変遷史』（日東書院、1931）、堀内敬三著『音楽五十年史』（鱗書房、1942）および『音楽明治百年史』（音楽之友社、1968）、園部三郎著『音楽五十年』（時事通信社、1950）、塚原康子著『十九世紀の日本における西洋音楽の受容』（多賀出版、1993）を始め、複数の著書や論文があるが、楽語のみに焦点を絞った文献や論文は見つけられなかった。ゆえに、本論文と同様の主旨を持つ先行研究はないものと捉え、進めてゆくことにする。

I. 明治以前から明治初期における洋楽導入

まず、日本における洋楽導入の変遷について簡潔に触れておく。

最初に我が国へやって来た洋楽は、天文18年（1549）、イエズス会宣教師フランシスコ・ザビエル Francisco de Xavier（1506～1552）によるキリスト教の伝来とともに、宗教音楽として渡って来たものである。布教が進むに従って、日本人の中からも積極的に洋楽を学ぼうとする者が現れ、当時、安土と有馬に設立されたセミナリヨ（小神学校）では「唱歌」および「器楽」の教育が行なわれたという記録が残っている⁽¹⁾。しかし宗教を伴った洋楽受容は、キリスト教の禁教、宣教師の国外追放、徳川幕府による鎖国政策、さらには信者への迫害などによって中断を余儀なくされ、日本における洋楽教育は一旦断絶する。

鎖国から約200年が経過し、諸外国からの求めに促された徳川幕府が、嘉永7年（安政元年）（1854）に開国を決断すると、洋楽は西洋式軍事体勢整備の一端として、軍隊の信号用トランペットや軍楽の中に積極的に取り入れられる。さらに、明治政府は「西洋から学べ」という姿勢を強く打ち出し、また諸外国との外交が盛んになるに従って、洋楽は軍楽隊だけでなく宮内庁雅楽部にも導入されるに至った。

洋楽は教育の分野にも積極的に導入された。明治5年（1872）に新学制が発布されると、小学校に「唱歌」、中学校に「奏楽」が取り入れられるが、当時の日本にはまだそれを教えられる人材もその方法論もなく、「當分コレヲ缺ク」とされ⁽²⁾、授業の実施には至らなかった。しかし明治7年（1874）、当時、愛知師範学校長であった伊澤修二（1851～1917）ら3名⁽³⁾が、諸外国の状況を知るため、政府によりアメリカ留学を命じられ、明治11年（1878）に欧米式の唱歌教育法を学んで帰国すると、日本の音楽教育課程は急速に整えられた。明治13年（1880）に文部省内に音楽取調掛が設置され、音楽家や唱歌教員の養成が始められると、それに伴い全国の小中学校において洋楽教育が開始されることに

(1) 平凡社『日本音楽大辞典』p.569「クラヴォ」

(2) 『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇』第一巻 pp.11-13「『学制』頒布と伊澤修二のアメリカ留学」

(3) 伊澤とともに派遣されたのは、後に音楽取調掛で伊澤の右腕となる神津専三郎（1852～1897）、東京音楽学校第八代校長となる高嶺秀夫（1854～1910）の2人。

なる。

だが、洋楽が一般社会に抵抗なく受け入れられたかと言えば、そうではなかった。政府の方針によって一方的に導入が進められた洋楽は、それまで人々が馴染んでいた邦楽とはあまりにも違いが大きく、日本の一般社会にすぐには定着しなかった。しかし明治16年（1883）に新しい外交・社交の場として東京日比谷に鹿鳴館が落成すると、西洋舞踏の伴奏として演奏される吹奏楽が人々の耳を捉え、その後、園遊会や祝賀会、また運動会などの屋外の娯楽行事の際に吹奏楽が演奏されることが流行する。当時、吹奏楽と言えば陸海軍の軍楽隊が演奏するものであったが、吹奏楽団への出張依頼が増えるに従って、公的な楽隊である軍楽隊が全ての要請に答えることは不可能となり、明治19年（1886）11月には、ついに軍楽隊出身者が中心となって、初の営利企業としての民間吹奏団「東京市中音楽会」を立ち上げ、増える需要に対応することになる。また、吹奏楽の派手な音響は広告宣伝にも利用され、日清戦役の頃になるとその人気はますます高まったが、一方では吹奏楽人気に乘じ、にわか仕込みの楽士らが旋律とリズムだけの粗悪な洋楽もどきを聞かせる怪しげな楽隊も増えた。しかし洋楽を本質的には理解していない当時の民衆には、むしろその方が受け入れ易かったようだ。

吹奏楽だけでなく、管絃楽、合唱、合奏、独奏などの音楽会も、当時、東京音楽学校の卒業式などの機会に合わせて年に数回行なわれたが、その回数ははなはだ少なく、聴衆はほとんど集まらなかったようだ。ともすれば会場の入り口で小使いの者が通りがかりの人を呼び止め、頼んで聞いてもらう程であつたらしい。しかし、「文明開化」の勢いは止まらず、明治19年（1886）7月に日本最初の洋楽振興機関である「大日本音楽会」が生まれると、その会員らである上流階級の裕福な紳士淑女と外国人60人を加えた二百数十名が中心となり、洋楽の音楽会や音楽練習会が鹿鳴館や後樂園で行なわれ始めた。

以上のような洋楽受容状況の中、明治23（1890）年9月、本邦初の音楽専門雑誌である『音楽雑誌』第一号が創刊される。すでに日本に本格的に洋楽が導入され始めてから20余年が経過していたが、上記のように洋楽の受容状況はまだ非常に曖昧で表面的なものであり、混沌としていたため、雑誌の位置づけも、経営基盤も、手探り状態の中での創刊であつたと想像される。

II. 『音楽雑誌』の中の音楽用語

1. 『音楽雑誌』について

日本で最初の音楽専門雑誌である『音楽雑誌』は、明治23年（1890）9月、裕福な家庭に生まれた熱心な音楽愛好家の四竈^{しかまとつじ}訥治によって創刊された。途中、明治29年（1896）に四竈から共益商社に経営を移し、『おむ賀く』と名称を変えるが、明治31年（1898）2月発行の第八巻第二号（第七十七号）までの約7年半に渡り、ほぼ毎月精力的に出版された。雑誌の内容は、細々ながらも当時徐々に一般社会に認知されつつあった洋楽関連の項目、例えば著名人の談話、音楽理論に関する講談、楽器の奏法、西洋の音楽大家の伝記などに加え、邦楽についての項目、作曲家の新作歌曲楽譜の発表、音楽学校の卒業式や音楽会の記事、唱歌学校などの検定試験問題、さらには楽器や音楽関連著作物の広告など、非常に多岐に渡っており、当時の一般社会の音楽状況を知る上で、貴重な資料であるといえる。

特に洋楽の項目については、その黎明期における情報誌としてだけでなく、教育的役割も担っていたと考えられ、娯楽的な記事などよりも「音楽理論」や「和声学」など、非常に学問的な記事が多いことを特筆しておきたい⁽⁴⁾。

2. 『音楽雑誌』調査の手順

音楽用語の調査は、以下の手順で行なう。

- ① 『音楽雑誌』全77巻の中から洋楽について書かれた記事に焦点を当て、その中から洋楽に関すると思われる単語を抽出する。その際、1つの記事に、同一の種類の単語が多く含まれる場合、全てを合わせて1語とみなす（例：第一音や第二音、「い」調や「ろ」調、第一絃や第二絃など）。また、1つの記事中、同じ表記の語は、何度出て来ても1語とみなす（「洋琴」などの単語が1つの記事中にいくつあっても1語とみなす）。ただし、同一の楽器と思われても表記が違う場合（例：「バイオリン」と「ヴァイオリン」など）は全て取り上げる。なお、今回の調査では本文中の記事のみ対象とし、「目録」、「演奏会、入学、卒業式、祝典式の記事」、「広告」は対象外とする。また、「人物名」、「作品名」、「楽器の部分、部品名」は抽出しない。
 - ② 抽出した単語は(1)楽器名（例：洋琴、風琴など）、(2)楽器分類（例：管属楽器、絃楽器など）、(3)編成・ジャンル（例：管絃楽、唱歌など）、(4)楽典に関する単語（例：和声、和絃など）、(5)演奏に関する単語（例：運指、奏楽など）、(6)その他に分類する。
- それぞれの項目ごとの単語数と全単語数に対する割合を示す（表1）。

表1：項目ごとの単語数と割合

分類項目	単語数	全体に対する割合
(1) 楽器名に関する単語	478	15.5%
(2) 楽器分類に関する単語	44	1.4%
(3) 編成・ジャンルに関する単語	429	13.9%
(4) 楽典に関する単語	1,801	58.4%
(5) 演奏に関する単語	189	6.1%
(6) その他	144	4.66%
合計	3,085	100.0%

上記の手順で単語を選んだ結果、対象となる単語は6項目合わせて3,085語となった。

最も多いものは(4)の楽典に関する単語である。また、最も少ないものは(2)の楽器分類に関する単語である。

Ⅲ. 考察

今回は上記6項目の中から、(1)楽器名に関する単語、(2)楽器分類に関する単語、の2項目の考察を行うことにする。

(4) 『音楽雑誌』では、たびたび和声学や楽典、音響学などの連載が組まれている。

(1) 楽器名に関する単語について

『音楽雑誌』の全記事中から抽出された楽器名に関する単語は178語であり、すべての抽出単語のうち15.5%を占める。ただし、これらの中には複数の同一単語が含まれているため、それらを1つにまとめると、楽器名に関する単語は全部で142語となる。さらに、もともと同一の楽器であるが様々な表記（例：バイオリン、ヴァイオリン、ヴィオリンなど）で書かれていたり、同一楽器であるが音域が違うことによって異なる表記をされているもの（例：中音サクソホーン、サキソナルトなど）を1つに集約していくと、全部で27種（不明のものを除く）の楽器に分類できた。これらの単語が含まれる記事の中には、記事の筆者自身が外国の文献を元にして記述したと思われる、西洋音楽史の記事や西洋の音楽家らの伝記⁽⁵⁾などもあり、必ずしも全ての楽器が当時の日本に存在し、人々の目に触れたというわけではないと考えられるが、少なくとも雑誌上で、そのような名前の楽器があることが紹介されたことは事実である。

以下に、上記分類で得られた楽器27種を単語抽出数が多い順に示す（表2）。

表2：『音楽雑誌』から抽出された楽器名とその数

順位	楽器の現代語	抽出数	順位	楽器の現代語	抽出数
1	オルガン	132	12	チェロ	3
2	ヴァイオリン（バイオリン）	102	12	鉄琴	3
3	ピアノ	69	12	ハーブシコード	3
4	アコーディオン	28	13	コルネット	2
5	クラリネット	18	13	コントラバス	2
6	トランペット	12	13	カスタネット	2
6	フルート	12	14	ヴィオラ	1
7	トライアングル	9	14	コンサーティーナ	1
7	バスドラム	9	14	トロンボーン	1
8	シンバル	8	14	バスーン	1
8	ハーブ	8	14	パンフルート	1
9	スネアドラム	7	14	ホルン	1
10	オーボエ	5	14	マンドリン	1
11	サクソフォーン	4		不明	33
				合計	478

上の表を見ると、第1位から第3位までを占めるオルガン、ヴァイオリン（バイオリン）、ピアノの3種の数が圧倒的に多いことがわかる。つまり、当時の日本では、これらの3つの楽器が代表的な洋楽器として認知されていたのであろう。この3つの楽器に関しては、明治のかなり早い時期から国内での生産が開始されていることも、一般への普及の大きな足がかりとなったのではないだろうか⁽⁶⁾。また第4位のアコーディオンと5位のクラリネットは、地方の音楽隊の記事の中などに多く見ることができ、これについてはIで触れた、当時流行の「音楽隊」の影響が強かったのではないかと想像される。

(5) 「バッハ傳」(第二号 pp.13-15) 中における「大風琴」

(6) 明治20年前後から、オルガンとピアノは横浜の西川虎吉、浜松の山葉寅楠が相次いで製造を始め、ヴァイオリンは名古屋の鈴木政吉が製造を始めている。

次に、オルガン、ヴァイオリン、ピアノの3つの楽器について、表記の面から見てみる。まず、オルガンを示す単語として抽出されたものを、数の多い順に示す(表3)。

表3：オルガンを示す単語とその数(単語に関しては原文のままとする。)

順位	楽 器 名	抽出数	順位	楽 器 名	抽出数
1	風琴	62	7	小型の風琴(ベビーオルガン)	1
2	オルガン	26	7	舌笛風琴(リードオルガン)	1
3	風琴(オルガン)	16	7	清音風琴(エンハルモニウム)	1
4	ヲルガン	5	7	ハーモニウム	1
4	風琴(おるがん)	5	7	ハーモニアン	1
5	風琴(ふうきん)	3	7	ハンドオルガン	1
6	大風琴	2	7	風琴(ヲルガン)	1
7	ウォールガン	1	7	笛舌製風琴(リードオルガン)	1
7	鍵盤舌笛風琴(リードオルガン)	1	7	ベビーオルガン	1
7	管製風琴	1			
7	管製風琴(パイプオルガン)	1		合 計	132

上記の表を見ると、1～3位までの「風琴」、「オルガン」、「風琴(オルガン)」の3つで全単語中の78%を占めているのが分かる。これらのように単に「風琴」ないしは「オルガン」などと表記されているものは、今日我々が一般にリードオルガンと呼んでいるものである。一方、第1位から第7位のベビーオルガンまで20種類のオルガンは、大きく見るとオルガン(リードオルガン)、パイプオルガン、ストリートオルガン、ハーモニウム、ベビーオルガンの5種類に分けることができる(表4)。

表4：オルガンを示す単語の分類

順位	楽器の現代語	抽出された単語
1	オルガン(リードオルガン)	「風琴」、「風琴(ふうきん)」、「オルガン」、「風琴(オルガン)」、「ヲルガン」、「風琴(おるがん)」、「ウォールガン」、「鍵盤舌笛風琴(リードオルガン)」、「舌笛風琴(リードオルガン)」、「風琴(ヲルガン)」、「笛舌製風琴(リードオルガン)」、「清音風琴(エンハルモニウム)」
2	パイプオルガン	「大風琴」、「管製風琴」、「管製風琴(パイプオルガン)」
3	ハーモニウム	「ハーモニウム」、「ハーモニアン」
3	ベビーオルガン	「小型の風琴(ベビーオルガン)」、「ベビーオルガン」
4	ストリートオルガン	「ハンドオルガン」

オルガン類の中で最も数が多いのはオルガン(リードオルガン)であり、全体の90%以上を占めている。以下、単語数の合計の多かったものから順に考察する。

オルガン(リードオルガン)に分類される単語には、多数の表記が見受けられるが、最も多いのは単に「風琴」という表記のものである。ただし、これには「おるがん」と読ませるものと、「ふうきん」と読ませるものとの2種類があり、ただ単に「風琴」とだけ書いてある場合については、記事の書き手がこの単語を読者にどのように読ませるつもりで書いているのか定かではない。また、「オルガン」と読みがながあっても、書き方がひらがなのもの、カタカナのもの、ま

た、単に「ヲルガン」と表記するものなどさまざまである。一方「ウォールガン」という表記もあったが、これは全77巻中たった一度しか現れないことから、「おるがん」の垂流であると考えられる。また、リードオルガンと読みがなを付して、漢字で「鍵舌笛風琴」、「舌笛風琴」、「笛舌製風琴」と表記された例も見られる。おそらく楽器名の和訳の際、楽器構造に注目したのだろう。これらの楽器は唱歌教育に最適のものとして明治期の各小中学校へ積極的に設置された事実があることから、洋楽の導入を果たす上で、大きな役割を担ったと言えるであろう。なお、「清音風琴（エンハルモニウム）」は、明治の物理学者であった田中正平（1862~1945）が明治22年（1889）に発明した純正調オルガンのことであるが、単語が抽出された記事の書かれた年代には、その構造がリードオルガンであったことが判明している⁽⁷⁾。

パイプオルガンに分類される単語には、「大風琴」や「管製風琴」など、その形状と楽器構造を示したものが多い。読みがなで「パイプオルガン」とも表記されており、すでに現在と同じ呼び方であったことが判る。ちなみにこの単語は、作曲家の伝記や西洋の教会についての言及がある記事に主として見られる。

ハーモニウムに分類される単語は「ハーモニアン」や「ハーモニウム」などである。現在一般にハーモニウムとされる楽器は、その構造においてリードオルガンが吸気式ふいごであるのに対して吐気式ふいごであるものとされているが、当時の日本においてそこまでの分類があったかは疑わしい。また、ヨーロッパ諸国では両者を「ハーモニウム」と呼ぶという習慣もあり、これらの単語が含まれる記事を書いた人物が、ヨーロッパ経由の情報で記事を書いたことによって、リードオルガンをこのように表記したということもありうる。ともあれ、この名前が当時すでに日本に紹介されていたことは事実である。

ベビーオルガンに分類される単語は、当時の日本における複数のオルガン製造所により相次いで販売された、通常のリードオルガンより小さい、小型のオルガンを示していると思われる。これは輸入されたものではないが、当時の日本が洋楽を受容するにあたって、自分達の都合の良いように楽器を改造したもので、いわば和洋折衷楽器と言える。

ストリートオルガンに分類した「ハンドオルガン」については、単語を抽出した記事の1つの中で、「この楽器はオルガン（リードオルガン）やアコーディオンと混同されているが別の楽器である」と書かれている⁽⁸⁾。実際、『音楽雑誌』の記事の中で、アコーディオンやコンサーティーナなど複数の種類の楽器に対して「ハンドオルガン」という表記がされている例が見られ、当時この名称が一般にかなり広い楽器を示す単語として使われていたのではないかと考えられる。なおここには明確にストリートオルガンを指すと判った単語のみを分類した。

次にヴァイオリン（バイオリン）について見てみる。単語抽出数の多い順に以下にあらわす。

(7) 単語が抽出された記事は、明治23年発行の『音楽雑誌』第二号のp15「清音風琴発明」。この楽器はドイツ皇帝ヴィルヘルム2世の前でも演奏され、当時ドイツで活躍していた指揮者のハンス・フォン・ビューロー Hans von Bulow (1830~1894) により「エンハルモニウム」と名付けられた。なお、その後明治25年（1892）には純正調パイプオルガンを完成させている。

(8) 明治24年2月発行『音楽雑誌』第六号 pp.17-18「アツコルジヨン」

(9) 明治24年10月発行『音楽雑誌』第二十五号 pp.15-21「吾妻琴」

表5：ヴァイオリン（バイオリン）を示す単語とその数（単語に関しては原文のままとする。）

順位	楽 器 名	抽出数	順位	楽 器 名	抽出数
1	バイオリン	50	7	ヴァ井ヲリン	1
2	ヴァイオリン	7	7	ヴィオーリン	1
3	ヴワイオリン	6	7	ヴィオリン	1
3	バイヲリン	6	7	高音鼓弓（バイオリン）	1
3	ヴァイオリン	6	7	胡弓（バイオリン）	1
4	ヴワイオリン	5	7	バイオーリン	1
5	ヴィオリン	3	7	ハイオリン	1
5	ヴィオリン	3	7	ブワイオリン	1
6	ヴハイオリン	2	7	洋胡弓	1
6	バイオリ	2	7	洋鼓弓	1
7	ヴワオーリン	1			
7	ヴァイオリン	1		合 計	102

ヴァイオリン（バイオリン）の表記は多岐に渡り、22通り見られる。このことは、当時の日本人がこの楽器の発音と表記にいかにか苦労したかを示していると言えよう。しかし、それぞれの違いは、ほとんど些細と言っても良い程度のカタカナ表記の差であって、多くは「バイオリン」に集約されるだろう。また、漢字表記としては「高音鼓弓」、「胡弓」、「洋胡弓」、「洋鼓弓」などがあるが、これらは当時邦楽器として一般社会に根付いていた「胡弓」にヴァイオリンのイメージを重ね合わせている様子が伺え、興味深い。

続いてピアノについて、同様に単語抽出数の多い順に記す（表6）。

表6：ピアノを示す単語とその数（単語に関しては原文のままとする。）

順位	楽 器 名	抽出数	順位	楽 器 名	抽出数
1	洋琴	21	6	ピアノ	2
2	ピアノ	18	7	ピアノ	1
3	ピヤノ	13	7	洋琴（やうきん）	1
4	洋琴（ピアノー）	5	7	ピアノフォーテ	1
5	ピアノー	3	7	ピヤノフォルト	1
5	洋琴（ピアノ）	3		合 計	69

ピアノの表記として最も多いのは「洋琴」である。2番目は「ピアノ」、3番目は「ピヤノ」であり、以上の3つでピアノに該当する抽出単語中の75%を占めている。このことから、当時すでにピアノについての名称はかなり固定されており、漢字表記では「洋琴」、カタカナ表記では「ピアノ」または「ピヤノ」が一般的だったと考えられる。ただし、漢字表記の「洋琴」の読み方としては「ようきん」が考えられるが、「ぴあの」と読みがなが付されている場合はあっても、「ようきん」という読みがなが付されている例はない。おそらく当時の人々は「洋琴」と表記されていた場合は通常の読み方通り「ようきん」と読んだが、筆者があえて「ぴあの」と読ませたい場合に限って、読みがなが付けられていたのではないだろうか。また、「ピアノ」と「ピヤノ」の違いについては、日本語の場合、両者を発音した時に大きな差がないことから生じた表記の差であろう。

楽器名について単語表出数に基づいて考察した結果、『音楽雑誌』が出版された明治23年(1890)から明治31年(1898)にかけての日本の社会において認知度が高かった楽器と、当時これらの楽器がどのように訳され、表記されてきたかが明らかになった。なお、抽出された全ての単語の一覧を表に示す(別表1)。

(2) 楽器分類に関する単語

次に、楽器分類に関する単語に注目する。これに該当する単語は、音楽用語全2,248語のうち44語であるが(表1)、洋楽導入の黎明期であった当時、日本国内に洋楽器に関する楽器分類体系があったとは考えにくく、これらの多くは、当時の一般社会の慣例的な分類に基づくものであると考えられる。その認識の上でこれらの単語を見ると、当時の人々が洋楽器の分類に対して以下の4つの視点を持っていた様子が伺える。

- ①国や地域、時代による分類
- ②西洋の慣例的な楽器分類に基づく分類
- ③楽器の演奏法による分類
- ④その他

以上の4点に注目して、考察を行なうこととする。

①国や地域、時代による分類

この分類に該当する単語は全44語中6語であり、「西洋楽器」が3語、「欧州楽器」が2語、「欧州管絃楽器」が1語である。楽器の前に「西洋」及び「欧州」と地域名が付されている。なお、日本の楽器については「日本楽器」や「吾邦楽器」という記述が目立つ。一方、江戸時代に中国から伝来した「明清楽」の楽器は「明清楽器」と呼ばれており、当時の日本人が国や地域、時代によって楽器を分類していたことが伺える。

②西洋の慣例的な楽器分類に基づく分類

この分類に該当する単語は全44語中29語である。

これらを「弦楽器に関する単語」、「鍵盤楽器に関する単語」、「管楽器に関する単語」、「管楽器と弦楽器両方に関する単語」、「その他の分類」の4項目に分類したものを以下に示す(表7)。

表7：西洋の慣例的な楽器分類に基づく分類(単語に関しては原文のままとする。)

分 類	単 語	抽出数
弦楽器に関する単語	「絃器」、「絃属楽器」、「絃楽器」、「絃楽器(いとがくき)」、「絃楽器(げんがくき)」	12
鍵盤楽器に関する単語	「有鍵盤楽器」、「鍵盤楽器」	8
管楽器に関する単語	「管楽器」、「管属楽器」、「管楽器(かながくき)」、「管楽器(くだがくき)」	7
管楽器と弦楽器両方に関する単語	「管絃」、「管絃楽器」	2
	合 計	29

抽出された単語の表記はさまざまであるが、もともと邦楽の分野には、琴や三味線、胡弓など「絃によって音を出す楽器」を「弾きもの」、箏や竈笛など「管によって音を出す楽器」を「吹きもの」として分類する習慣があり、洋楽導入以前からあったこれらの分類に、同様の発音原理を持つ洋楽器が当てはめられて捉えられたのではないだろうか。これらに対し、「鍵盤楽器」は明治期までほとんど国内に存在しなかったにもかかわらず、それを示す単語は8語抽出され、楽器分類に関する単語の中では2番目に多く見られた。このことから、当時新しい楽器であった鍵盤楽器類が、如何に人々に受け入れられていたかが伺える。また、「鍵盤」という言葉は、英語の「key board」の和訳が一般的に使われるようになったものと思われる。

③楽器の演奏法による分類

この分類に該当する単語は全44語中7語である。これらの語は、大きく「管楽器に関する分類」と「打楽器に関する分類」の2つに分けられる(表8)。

表8：楽器の演奏法による分類(単語に関しては原文のままとする。)

分類	抽出された単語	抽出数
管楽器の演奏に関する分類	「吹奏楽器」、「吹奏楽器(ふくがくき)」、「吹奏楽器」、「風管」、「風管的楽器」、「風器」	6
打楽器の演奏に関する分類	衝突的楽器	1
	合計	7

「管楽器の演奏に関する分類」に含まれる単語には、「吹奏」という言葉が多く見られる。「吹奏」とは、雅楽で用いられる用語のひとつであり、管楽器の演奏や管楽器を含む編成(管弦)の演奏を示した単語である。すなわち、雅楽用語が洋楽に転用された一例と言えるだろう。

また、「風」という言葉も複数見られる。これは、単に呼吸により息を吹き込むことを「風」に例えた言葉とも言えるが、英語で管楽器を示す単語「wind instrument」(風の楽器)が和訳され、一般に使用されるようになった可能性もある。

「打楽器の演奏に関する分類」に含まれる単語では、「衝突的」という言葉が見られるが、『音楽雑誌』全巻の中でただ一度しか出て来ないため、おそらく記事を書いた人物の主観的表現であり、一般的な単語ではなかったのではないだろうか。

④その他の分類

上述の3つの分類に入らないものとして、「自鳴楽器」と「固定音楽器」の2つの単語が、各1つずつ抽出された。「自鳴楽器」は本来体鳴楽器のことであると考えられるが、『音楽雑誌』の中では「トロンボンベツ」という楽器を示して使われている⁽¹⁰⁾。「固定音楽器」はオルガンやピアノなど、ひとつの場所に設置して使用する楽器の総称として使われているようだが、一般的な分類用語とは区別されるべきだろう。

以上から、『音楽雑誌』に見られる楽器分類には、国や地域、時代によって分けられている

(10)『音楽雑誌』第三十二号 p.6「泰西音楽家小傳(其三)」参照。

ものや、楽器の形状によるもの、演奏法によるものなど複数の分類方法があり、それらを表す単語には、雅楽用語から転用されたものが含まれることが判った。言葉を換えれば、日本における洋楽器の導入は、雅楽の土台の上に形成されたといえるだろう。

IV. まとめ

以上の2点の調査から、洋楽導入期における音楽用語については、以下のようにまとめることができる。

1. 楽器名の多くは、もともと日本に定着していた邦楽器になぞらえたり、その形状や構造などを想像しやすいような和訳がなされた。また、洋楽導入期には1つの楽器に対して複数の名称が使用されており、その表記も定まっていなかったが、その中から次第に、今日一般的に洋楽器の名称として認知されている名称に統一されていった。
2. 楽器分類は、国や地域や時代、西洋の慣例的な楽器分類、演奏方法などの視点で行なわれた。また、雅楽における用語が洋楽器の分類用語に転用された例が見られ、洋楽導入は邦楽の基礎の上に成されたものと判った。

今回の調査から判明した上記の2点から、明治期の人々が洋楽を導入する際、試行錯誤を繰り返した様子が認められた。それでは、これらの用語はいつごろ現在の形になり、日本の社会に定着したのだろうか。今後の課題にしたい。また、今回取り上げられなかった(3)編成・ジャンルに関する単語、(4)楽典に関する単語、(5)演奏に関する単語については引き続き分析を行なう。

【参考・引用文献】

(著者名の50音順)

- 伊沢修二 山住正己校注 1971『洋楽事始 音楽取調成績申報書』 東京：平凡社
 海老澤有道 1983『洋楽伝来史－キリシタン時代から幕末まで－』 東京：日本基督教団出版局
 1947『洋楽演劇事始－キリシタンの音楽と演劇－』 東京：太洋出版社
 四竈訥治 1890-1894『音楽雑誌』 東京：音楽雑誌社〔復刻版〕1984 東京：出版科学総合研究所
 園部三郎 1950『音楽五十年』 東京：時事通信社
 竹井成美 1995『南蛮音楽その光と影－ザビエルが伝えた祈りの歌』 東京：音楽之友社
 塚原康子 1993『十九世紀の日本における西洋音楽の受容』 東京：多賀出版
 東京芸術大学百年史編集委員会 1987『東京芸術大学百年史』－東京音楽学校篇第1巻 東京：音楽之友社
 中村理平 1993『洋楽導入者の軌跡』 東京：刀水書房
 平凡社 1989『日本音楽大事典』 東京：平凡社
 堀内敬三 1968『音楽明治百年史』 東京：音楽之友社
 堀内敬三 1942『音楽五十年史』 東京：鱒書房
 三俊三郎 1931『本邦洋楽変遷史』 東京：日東書院
 山口常光編 1973『陸軍軍楽隊史』 東京：三青社

別紙1：音楽雑誌から抽出された楽器名一覧

楽器の現代語	『音楽雑誌』中での楽器の名称
アコーディオン	手風琴、アッコルジョン、アッコージョン、アツコルジアン、アッコルジョン、アツコルジョン、アツコルジヨン、エッコーチヨン、ハンドオルガン、手風琴（アッコルジョン）、手風琴（アツコルジヨン）、手風琴（アツゴロジヨン）、ハントオルガン
ヴァイオリン（バイオリン）	バイオリン、ヴワイオリン、ヴワイオリン、ヴワオーリン、洋胡弓、高音胡弓、ヴァイオリン、ヴァイオリン、ヴァイオリン、ヴァイオリン、ヴァ＃ヲリン、ヴィオリン、ヴィオリン、ヴィオリン、ヴァイオリ、ハイオリン、バイヲリン、胡弓（バイオリン）、ブワイオリン、洋鼓弓
ヴィオラ	中音鼓弓（テナー）
オーボエ	鸚八、鸚八横笛
オルガン	風琴、オルガン、大風琴、管製風琴（パイプオルガン）、オルカン、鍵盤笛風琴（リードオルガン）、ウォールガン、オルカン、小型の風琴（ベビーオルガン）、舌笛風琴（リードオルガン）、清音風琴（エンハルモニウム）、ハーモニアム、ハーモニアン、ベビーオルガン、風琴（オルガン）、風琴（ふうきん）、風琴（おるがん）、ヲルガン
カスタネット	カスタネット、仙鼓（カスタチット）
クラリネット	クラリチット、クライチット、クラリオチット
コルネット	コンチット、コツチット
コンサーティーナ	コンセルチナ
コントラバス	コントルバース
サクソフォーン	サクソフヲーン、サキソナルト
シンバル	小鉢（サンバル）、サンバリー
スネアドラム	小太鼓、ピッチケース
チェロ	低音鼓弓（セロ）、セロ
鉄琴	鐵琴（てつきん）
トライアングル	三角鉄（トライアングル）、三角器（トライアングル）
トランペット	喇叭（らつは）、歩兵喇叭（トランペット）
トロンボーン	トロンボ
ハープ	ハープ、立琴（ハープ）、ライル
ハープシコード	ハーピスコード、ハーピスコート
バスーン	バcssーン
バスドラム	大太鼓、ヘースヅラム
パンフルート	バンデマン笛
ピアノ	ピアノ、ピヤノ、ピアノー、ピヤノフォルト、ピアノフォーテ、洋琴、洋琴（ピアノ）、洋琴（ピヤー）、洋琴（やうきん）
フルート	フルート、フリュート、高音横笛（ピウテット、フリート）
ホルン	デナホルン
マンドリン	8 絃琵琶（マンドリン）
不明	パンハールモニコン、サツプラノー、大喇叭（おほらつば）